

## インターンシップ実施調査

山田 晃 (大学教育センター・教育プログラム部門)

### A survey of internship enforcement

Akira YAMADA (Center for Higher Educational Development)

Internship enforcement survey was conducted targeting national universities in the area of technology and agriculture across the country in Japan. Status of the implementation of the internship as part of educational curriculum was summarized. The results of the survey revealed the followings: (i) Rates of undergraduate departments conducting internship program were 86 % in technology and 78% in agriculture, on the other hand, rates of postgraduate departments were under 50 % both in technology and agriculture, (ii) Rates of undergraduate students taking internship curriculum were 18% in technology and 30 % in agriculture, on the other hand, those of postgraduate student were 10 % in technology and 4 % in agriculture, (iii) Questionnaire about the educational effect received highest evaluation mark out of 4 ranks from 87 % of universities. The results demonstrated the situation that the internship enforcement in university educational curriculum is progressing much more than expected.

[キーワード：インターンシップ, アンケート調査, 教育カリキュラム, 教育評価, 教育改善]

#### 1 はじめに

インターンシップの教育面での効用が認識されるようになり、文部科学省が行った平成16年度インターンシップ実施状況調査<sup>(1)</sup>によれば、全国4年制大学の59%の大学で単位認定を行う授業科目としてインターンシップを実施し、その参加学生数は39,010人(前年度比で4,885人増)にもほり年と共に増加傾向にある。また、毎年刊行される大学ランキングデータ<sup>(2)</sup>にインターンシップ参加学生数が掲載されており、大学教育サービスの充実度を図る指標の一つになっている。一方、海外においてはインターンシップが教育現場に積極的に取り入れられており、最も盛んな米国においては殆どの大学にインターンシップ科目が導入されており全米の60%以上の大学生が履修していると言われている。わが国では、平成9年にインターンシップの推進が閣議決定され、その後、文部科学省、厚生労働省、経済産業省の三省が中心になって政策を進めたことが契機になって全国に広まった。また、先ごろ出された平成17年中央教育審議会答申の「わが国の高等教育の将来像」<sup>(3)</sup>や「新時代の大学院教育」<sup>(4)</sup>の中でも、大学教育現場でのインターンシップの活用が推奨されている。

本学においては、平成12年度カリキュラム改正を機に、工学部の応用分子化学、化学システム工学、機械システム工学、情報コミュニケーション工学の4学科ならび

に、農学部の地域生態システム学科人間自然共生学コースにインターンシップ科目が新設され、平成14年度(12年度入学生が3年次に進級した年度)を皮切りに、これまで4年間に渡ってインターンシップを実施してきた。さらに、平成15年度に策定された東京農工大学中期目標中期計画において、“インターンシップ等による社会連携”、“海外でのインターンシップ等による学生の活動に対して、単位として認定する方向で検討する”の文言が盛り込まれ、インターンシップの活用推進が、教育目標達成のための方策の一つとして掲げられた。

これを受けて、本学中期目標計画の実施事業の一つとして、教育プログラム部門が担当してインターンシップ活用に関する方策を検討することになった。全国の大学におけるインターンシップの調査資料として毎年、文部科学省が実施しているインターンシップ実施状況調査<sup>(1)</sup>や、JRCM産学金連携センターが刊行している「インターンシップ・データブック2005」<sup>(5)</sup>があり、本学のインターンシップの活用方針を策定するにあたり、当初はこれらの資料を活用できそうに思われた。しかし、これらが大学発のデータでないためか、大学のニーズを必ずしも十分に反映していないことが判明した。このため、必要な調査項目を盛りこんだ農工大独自の調査を実施する必要があるとの結論に至った。そこで、平成17年11月09日付け(回答期限：11月末日)で、全国国立大学の工学系および農学系の学部、大学院各々の機関宛にアンケート調査を実施した。発送先ならびに回答が寄せられた機関の数の内訳は表1に示すとおりである。本稿は、このイン

ターンシップアンケート調査の集計解析結果を報告するものである。

表1 アンケートの発送先機関の数と回答数の内訳

		発送先数	回答数	回答率 (%)
学部	工学系	56	43	76.8
	農学系	34	20	58.8
大学院	工学系	56	41	73.2
	農学系	29	16	55.2

## 2 調査結果

### 2.1 学部 / 研究科実施率

最初の、「貴大学において、インターンシップをカリキュラムの一環として実施していますか」の質問に対する回答をまとめた結果を表2に示す。この結果をみると、学部の実施率は、工学系、農学系ともに100%に迫る数値に達している。一方、大学院はまだ学部ほどにはインターンシップが浸透していない。その内訳は工学系が学部の3/4程度の比較的高い実施率であるのに対し、農学系は学部の1/3程度の低い実施率に留まっている。ちなみに、文部科学省調査の国公私立全大学を対象とした学部実施率は40.7%、大学院の研究科実施率は4.6%である。これに比べて本調査結果の数値がかなり高いが、これは他分野に比べて理工農系の実施率が一段と高いこと、さらに、公立、私立に比べ国立大学の実施率が高い事実を、反映したものと思われる。

表2 カリキュラムとして実施している学部/研究科実施率 (実施率はカリキュラムとして実施している学部/研究科の数を、回答総数で割った値で計算した)

		実施	未実施	実施率 (%)
学部	工学系	42	1	96.7
	農学系	18	2	90.0
大学院	工学系	30	11	73.2
	農学系	5	11	31.3

### 2.2 科目名

インターンシップをカリキュラムの一環として実施している機関を対象に、実施しているインターンシップ関連科目の科目名を尋ねた。その回答結果は、学部では、「インターンシップ」が最も多く、次いで語頭もしくは語尾に「インターンシップ」の付く科目名が多くあった。そ

の他は、「学外」、「工場」、「特別」、「体験」、「社会体験」、「職業」、「現地」と、「実習（まれに研修）」の2つのキーワードを組み合わせた科目名（例えば「学外実習」など）が多かった。一方、大学院については、単純に「インターンシップ」だけの科目名は学部比べて少なくなる。また、数は多くないが、科目名に「海外」、「国際」を冠した海外インターンシップを実施している大学院があった。

### 2.3 学科 / 専攻実施率

学部・研究科実施率が100%近い数値に達している調査結果になったが、数多くある学科（または専攻）の中で1学科しか実施していない場合もあり得るため、この

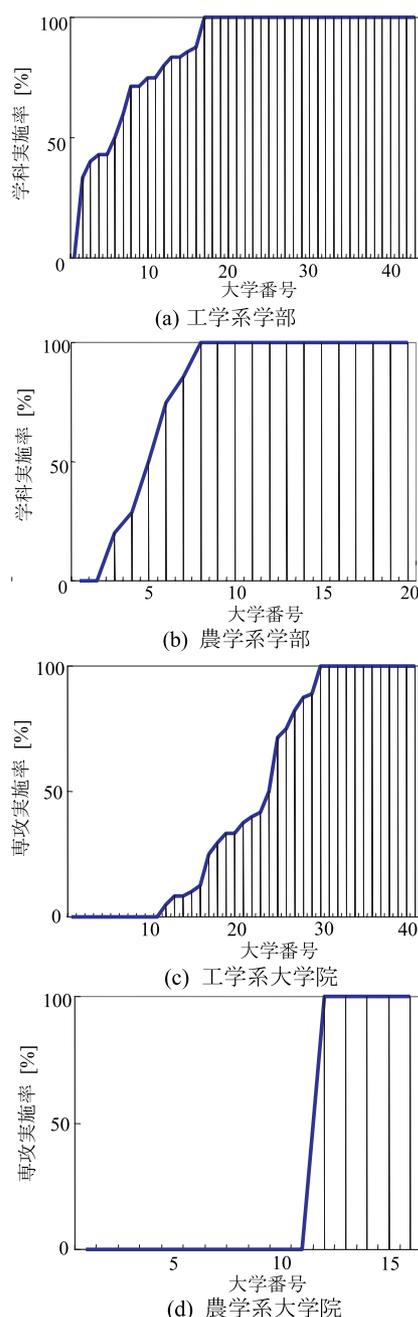


図1 学科 / 専攻実施率の分布

数値から直ちに適正な判断を下すことができない。この点を明確にするために、本調査では、実施している学科数/専攻数についての質問を行った。回答のあった実施学科(専攻数)の数を全体の学科数(専攻数)で除した学科/専攻実施率を算出した。こうして求めた大学(大学院)ごとの学科/専攻実施率の分布を図1に示す。また、大学(大学院)ごとの学科/専攻実施率の平均値の集計結果を表3に示す。これらの結果をみると、学部/研究科実施率と学科/専攻実施率との間に多少開きがあるが、2.1に示した学部/研究科実施率とほぼ同様の傾向が示されている。また、全学科で実施(100%の実施率)している学部が、工学系で63%、農学系で65%もの多くの大学に及んでいる。

表3 大学ごとの学科/専攻実施率の平均値

	工学系	農学系
学部	85.6%	78.0%
大学院	47.3%	31.3%

## 2.4 実施学年/実施時期/期間

実施学年、実施時期、実施期間の質問に対する回答の集計結果を表4～6に示す。実施学年は、学部にあつては3年次、大学院にあつては1年次に実施する例が殆どであった。これらの学年への集中は、就職支援を兼ねた事情が働いた結果であると思われる。それ以外には、2-4年次を中心に幅を持たせて実施する大学が多くみられた。例外的に、学部1年次に実施している大学があったが、これは入学直後の導入教育として位置づけているためと考えられる。反対に、4年次を対象に1～2月の7週間に渡って必修で実施している大学があった。次に、実施時期をみてみると、殆どの大学が夏季休業中に実施している。しかし、特定の時期への過度な集中は受入先確保の観点から必ずしも得策でないため、別の選択肢があつてもよさそうに思える。最後に、実施期間は2週間程度が殆どであり、その前後の1週～4週の範囲でばらつきがあつた。以上のように殆どの大学が、ほぼ同一の学年、時期、期間に実施している傾向にある。その一方で、類型から外れた形態をとる大学も少なからずあり、教育目的を第一に考えた場合はそのような多様性が求められてよいように思われる。

表6 実施期間(期間の単位は週、集計値は各機関からの回答を1票とした時の回答数)

		0.5	1	1-2	2	1-3	1-4	2-3	3	2-4	4	2-8	7
学部	工学系	1	4	6	13	1	5	6	0	0	1	0	1
	農学系	0	0	5	6	1	1	1	1	0	0	0	0
大学院	工学系	0	3	2	9	1	1	3	1	1	2	1	0
	農学系	0	0	1	2	0	0	0	1	0	0	0	0

表4-1 実施学年(学部)

(集計値は各機関からの回答を1票とした時の回答数)

	1年	3年	2-3年	2-4年	3-4年	1-4年
工学系	1	29	2	6	2	1
農学系	0	11	2	1	0	1

表4-2 実施学年(大学院)

(集計値は各機関からの回答を1票とした時の回答数)

	1年	1-2年	1-5年
工学系	16	7	1
農学系	2	2	0

表5 実施時期

(集計値は各機関からの回答を1票とした時の回答数。春、夏、冬とあるのは各々春季、夏季、冬季の休業期間を表す。)

		夏	冬	春夏	夏冬	春夏冬	学期中	全季
学部	工学系	34	1	2	0	1	3	1
	農学系	16	1	1	0	0	1	0
大学院	工学系	20	0	0	1	1	0	3
	農学系	4	0	0	0	0	0	0

## 2.5 単位認定

卒業のための単位として認めているかどうか(卒業認定単位と自由単位の別)の質問、並びにその場合の単位数を問う質問に対する回答の集計結果を表7に示す。学部、大学院ともに、卒業認定単位として認める大学が大半を占めている。ただし、自由単位として実施しているのは工学系に多く、農学系には殆ど見られなかった。次に認定単位数は殆どが1～2単位の間にあり、そのうち最も多い回答は2単位での実施であった。

表 7-1 認定単位数

(学部, 集計値は各機関からの回答を1票とした時の回答数)

		1単位	2単位	1-2単位	1-4単位	5単位以上
工学系	卒業認定	7	14	8	0	0
	自由単位	5	2	4	1	0
農学系	卒業認定	6	5	2	0	0
	自由単位	0	0	0	1	0

表 7-2 認定単位数

(大学院, 集計値は各機関からの回答を1票とした時の回答数)

		1単位	2単位	1-2単位	1-4単位	5単位以上
工学系	卒業認定	4	14	4	0	1
	自由単位	2	1	2	0	0
農学系	卒業認定	1	2	0	0	0
	自由単位	0	0	0	0	0

## 2.6 過去3年間の履修状況

インターンシップ科目の過去3年間の履修者数と、科目を設けている学科/研究科の入学定員を尋ねた。その回答結果から履修対象者数に対する履修者数の割合を履修者率として集計した結果を表8に示す。ただし、これらのデータを集計するに当たって履修対象者数には、集計調査上の困難を避けるために現員数でなく入学定員で代用した。この結果から、学部の履修者率は工学系で18%前後、農学系で30%前後であった。実施率は工学系が高いのに対して、履修者率は農学系の方が高いことが特徴的である。一方、大学院の履修者率は、学部と比べて、工学系で10%前後、農学系で4%前後とかなり低くなっている(ただし、大学院農学系のサンプル数は4大学と少ないことを付記しておく)。次に、過去3年間の履修者数の変化を集計した結果を表9に示す。ただし、年度ごとの増減傾向を正確に把握するために、過去3年間のデータが全て揃っている大学のみを集めた結果を示してある。これらの結果から、農学系に比べて履修者率が低い工学系の増加傾向が高いことがわかる。また、学部と大学院の比較においても、同様に大学院における増加傾向が高くなっている。最後に、個別の大学ごとの履修者率の分布を図2に示してある。これらの結果から、履修者率は大学によって0%から100% (必修で行っている場合) までばらつきが非常に大きいことがわかる。特に、工学系学部においては、履修者率が低いグループと高いグループの2極化現象が見られる。これらは、必修と選択の別、卒業認定科目と自由科目の別、受入先確保の方法、大学側の関与の度合い、など様々な要因が働いた結果であると考えられる。とはいえ、履修者数は年とともに堅実な

伸びを示していることから改善のきざしもみえる。

表 8-1 学部の履修者率

(履修者率=(履修者数)/(科目を設置している学科の入学定員))

年度	工学系(%)	農学系(%)
2005	17.6	29.5
2004	18.2	29.3
2003	16.2	30.2

表 8-2 大学院の履修者率

(履修者率=(履修者数)/(科目を設置している専攻の入学定員))

年度	工学系(%)	農学系(%)
2005	10.5	3.8
2004	9.0	4.5
2003	7.8	1.0

表 9-1 学部の過去3年間の履修者数の増減

(3年間のデータが揃っている大学の履修者数の集計結果)

年度	工学系(34大学)	農学系(15大学)
2005	2942	627
2004	2638	675
2003	2319	523

表 9-2 大学院の過去3年間の履修者数の増減

(3年間のデータが揃っている大学の履修者数の集計結果)

年度	工学系(22大学)	農学系(3大学)
2005	669	8
2004	569	7
2003	486	2

## 2.7 派遣前後の支援

派遣の前後に大学側が実施している支援について、複数回答可の条件で、①派遣前教育、②ガイダンス説明会、③派遣受入先の紹介斡旋およびコーディネート、④派遣後の報告発表会、⑤派遣後のレポート提出、の中から回答を求めた。その集計結果を表10に示す。また、表10において、ほぼ半数の大学が、①、②の何れか一方と③～⑤までの全てを実施していた。これらの結果から、多くの大学が手間隙をかけて行き届いた支援を行っている様子が見える。また、①の派遣前研修を実施している場合について、その具体的な研修名を尋ねた結果、「インターンシップ事前研修」のような一般的な名称が多かった。これとは反対に、「ビジネスマナー研修」のように、マナー講習に重点を置いて行っている大学も数例見られた。

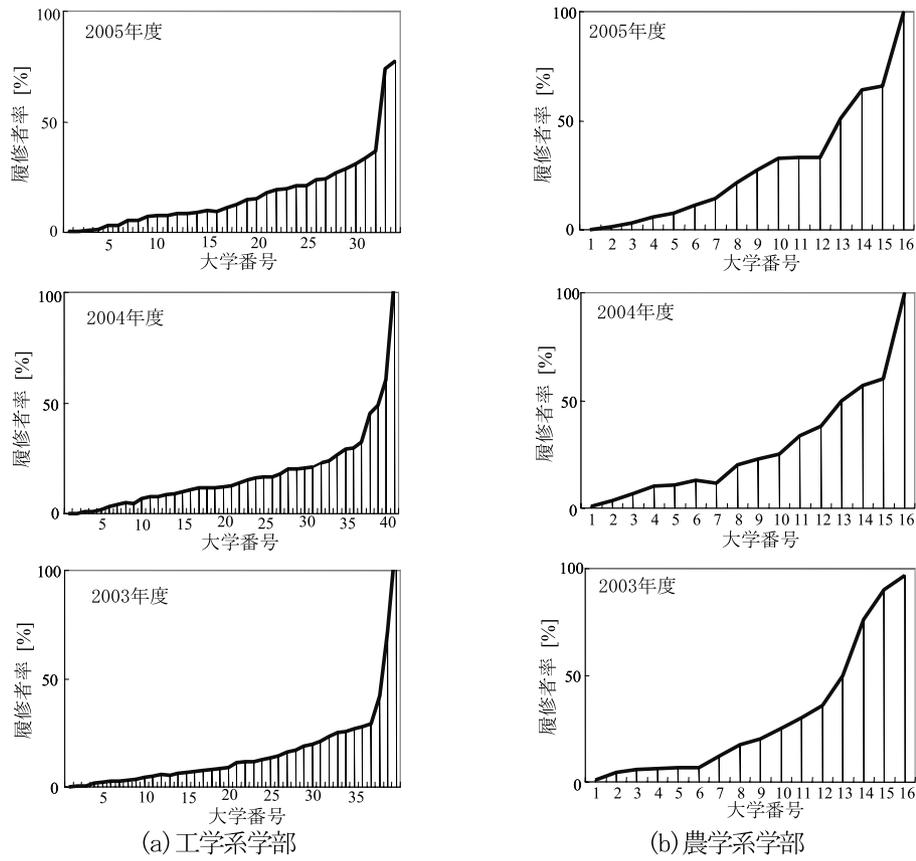


図 2-1 学部における履修者率（履修者 / 対象学科の入学定員）の分布

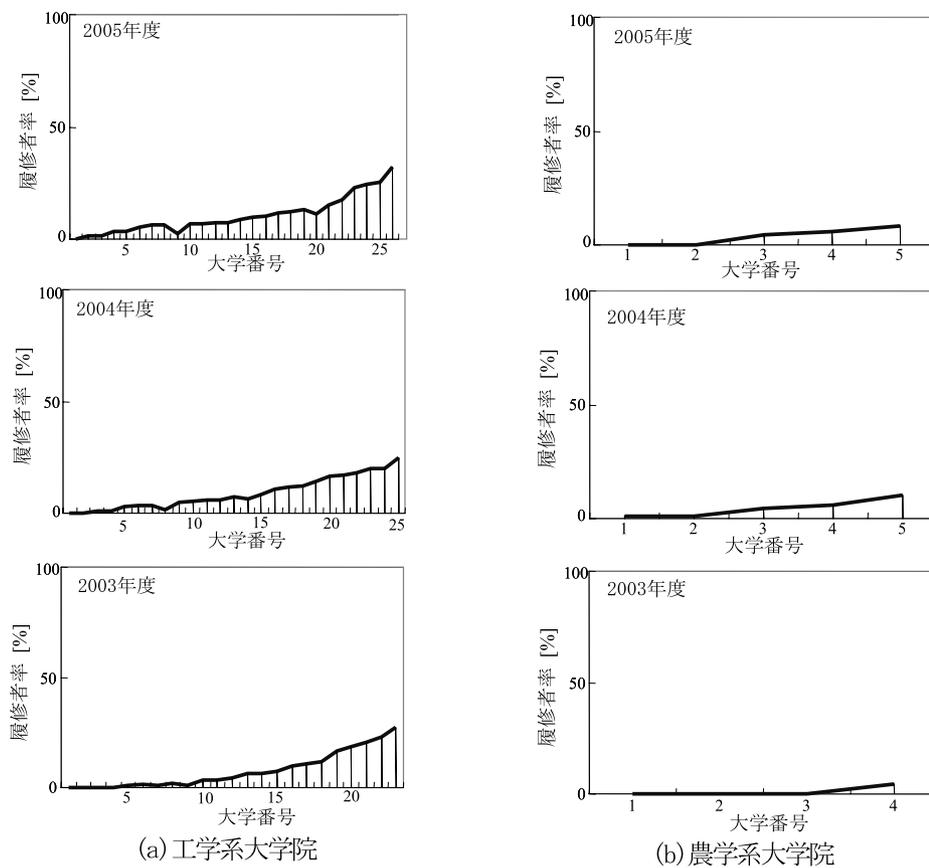


図 2-2 大学院における履修者率（履修者 / 対象学科の入学定員）の分布

表10 派遣前後の支援教育（複数回答可）

（集計値は複数回答可の条件で行った各機関からの回答数，①～⑤の各々は，① 派遣前教育，② ガイダンス説明会，③ 派遣受入先の紹介斡旋およびコーディネート，④ 派遣後の報告発表会，⑤ 派遣後のレポート提出，を表す）

		①	②	③	④	⑤
学部	工学系	18	29	28	27	33
	農学系	9	16	12	10	16
大学院	工学系	9	17	15	14	18
	農学系	5	3	3	2	4

## 2.8 作業負担

実施に関わる作業負担をどこが担っているかを，① 教員が中心，② 事務が中心，③ 教員と事務が半々，④ その他，の中から選択する回答を求めた。その集計結果を表11に示す。これらの結果をみると，①または③の回答が殆どを占めており，②の回答はあまり見られなかった。履修者率の高い大学ほどその傾向が顕著であることから，事務の協力を仰ぎながらも，教員が一定以上の責任を持って関与することが重要であるように思われる。学部と大学院の比較では，学部では③の回答が多いのに対して，大学院は①の回答が多い傾向が見られた。この結果は，大学院においては，配属研究室の指導教員が支援する比重が高い事情を反映したものと考えられる。

表11 作業，業務の負担者

（集計値は各機関からの回答を1票とした時の回答数）

		教員	事務	教員と事務	その他
学部	工学系	11	7	18	2
	農学系	6	0	10	1
大学院	工学系	14	5	9	1
	農学系	1	0	4	0

## 2.9 教育効果

インターンシップの教育効果の有無について，① 大いにある，② 多少ある，③ どちらともいえない，④ あまりない，から回答を求めた。その集計結果を表12に示す。

表12 教育効果の有無

（集計値は各機関からの回答を1票とした時の回答数，①～④の各々は，①大いにある，②多少ある，③どちらともいえない，④あまりない，を表す）

		①	②	③	④
学部	工学系	32	4	2	0
	農学系	18	0	0	0
大学院	工学系	18	1	4	0
	農学系	5	0	0	0

教育効果の有無については，圧倒的に大多数の大学が，①の回答を寄せていることは，注目に値する。さらに，教育効果があったとした場合に対して，どのような教育効果が認められるかについて質問を行い，各項目の中から回答を求めた（複数回答可）。その集計結果を表13に示す。①②③は，専門教育の補強強化を意図した項目，④⑤は就職支援的な側面の強い項目，⑥⑦は教養教育の総仕上げとも言うべき項目になっている。どの項目も一様に高く評価されているが，⑥が最も高く，次いで①，⑤，⑦の評価が高かった。一方，③や④のスキルに関連した項目の評価はやや低かった。また，①～⑦以外の自由回答には，“日頃の勉強不足，専門性の欠如を実感して進学希望者が増える”などの意見があった。

表13 教育効果の内容

（集計値は複数回答可の条件で行った各機関からの回答数，①～④の各々は，① 目的意識を持つことによる学習意欲向上，② 大学での学習を実践を通して理解する，③ 専門分野のスキル取得，④ 就職のためのスキル取得，⑤ 職業を理解する，職業適性を知る，⑥ 社会におけるモラル，マナー，対人能力を身につける，⑦ 社会経験を通じた人格形成，社会の一員としての心構えを身につける，の項目を表す）

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
学部	工学系	28	22	13	11	31	32	26
	農学系	15	14	6	5	14	15	13
大学院	工学系	16	13	10	10	20	18	18
	農学系	2	4	2	2	3	3	3

## 2.10 全体を通しての意見

全体を通しての意見やコメントを自由回答形式で回答して貰った。その結果，“インターンシップの教育効果は，実際に参加した学生からの感想，その後の学生の姿勢から明らかに認められる”に代表されるように，教育効果を高く評価する意見が複数あった。一方で，実施上

の問題点や対策を指摘する意見として、受け入れ先の確保、学生の希望と受け入れ先企業のマッチング、に関する意見が多数あった。その他に、適正な成績評価方法、宿泊先、交通費の確保、成果に対する機密保持の取り扱い、保険加入、などに関する意見があった。

## 2.11 インターンシップを実施していない学部/研究科の状況

冒頭の質問で、“インターンシップを実施していない”との回答があった学部/研究科に対して、今後の計画の有無を尋ねた。その質問に対する回答の集計結果を表14に示す。工学系については、現在未実施の大学のうちの残る1学部、並びに大学院の5研究科（未実施10研究科の半数）が実施を予定している。一方、農学系は大学院の2研究科のみが実施計画有りとするに留まっており工学系に比べてやや低調である。学部と大学院の比較では、学部は実施率がほぼ飽和状態に達しているのに対して、未実施の多い大学院では今後も増加が見込まれる。

表14 インターンシップを実施していない学部/研究科の計画の有無

		計画有	計画無
学部	工学系	1	0
	農学系	0	2
大学院	工学系	5	5
	農学系	2	9

## 3 まとめ

本稿では、国立大学理工農学系におけるインターンシップ科目の、実施率や履修者数の状況、実施形態、運用上の問題点、教育効果の評価、などの観点から行ったアンケート調査の結果を報告した。まず、インターンシップのカリキュラムへの導入状況を集計した学科実施率の平均値は、工学系学部で86%、農学系学部で78%であった（全学科実施比率は、工学系学部で63%、農学系学部で65%）。これらの結果から、学部においてはインターンシップ科目の設置がもはや当たり前に近い状況になりつつあり、予想以上に導入が進んでいる実態が明らかになった。一方、大学院における専攻実施率は、工学系47%、農学系31%である。学部から導入が進められてきた経緯から、まだ学部ほどには浸透していないが、今後工学系大学院を中心に導入がかなり進むことが予想される。

次に、インターンシップ科目の履修実績を評価検証するために集計した履修者率は、工学系学部で約18%、農

学系学部で約30%、工学系大学院で約10%、農学系大学院で約4%であった。履修者率の多寡は見方によって評価が分かれるが、工学系学部や大学院のように履修者率が低い所ほど増加傾向が顕著であり改善のきざしがみられる。一方、教育効果に関連した調査では、学部/大学院を合わせて工学系で82%、農学系で100%の大学から、4段階中最高位（おおいに教育効果有り）の評価が寄せられた。また、運用上の問題に関連した調査から、殆どの大学が事務と教員双方の協力の下に、大きな負担を抱えながらも、行き届いた支援を実施している様子が伺われ、インターンシップにかける意気込みと期待の大きさが感じられた。その他、履修者の増加を図るための技術的課題として、受け入れ先の確保や学生の希望とのマッチングなどの問題を指摘する声が多くあった。そのためには、外部斡旋機関の利用、共同研究先との連携、実施時期の検討など、今後とも様々な知恵や工夫を働かせていく必要がある。

昨今の大学の教育現場において、学生の学力低下、専門に対する興味関心の喪失、物離れや理科離れ、問題意識や社会意識の希薄化、など様々な教育上の病理が噴出してきた。これらは、論文研究を主体にした従来からの理工農学系の教育メニューだけでは、解決困難になっている一面を表している。時代の変化に伴う新しい病理には新しい処方箋が求められている。間違いなくインターンシップにその一つの役割が期待されている。今後はインターンシップの量的拡大だけでなく、質的側面からの努力が求められる。そのためには、大学の特色や教育目標と関連させて教育プログラムの中にインターンシップをどのように位置づけるかが重要となる。その方針策定のための基礎資料として本調査結果が役立つことを願って、本稿を閉じることにする。

## 参考文献

- (1)「大学等における平成16年度インターンシップ実施状況調査結果について」, 文部科学省, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/17/11/05112801.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/11/05112801.htm)(2005.11).
- (2)「大学ランキングASAHI ORIGINAL 2006年版」,朝日新聞社出版本部大学編集室,(2005.4).
- (3)「わが国の高等教育の将来像」,平成17年1月28日中央教育審議会答申.
- (4)「新時代の大学院教育」,平成17年9月5日中央教育審議会答申.
- (5)「大学インターンシップ・データブック2005」,NPO JRCM産学金連携センター(2005.4).

## 付録 インターンシップアンケートの内容

以下は学部用のアンケート用紙である。大学院用は、“学科”を“専攻”に，“卒業”を“修了”に置き換える必要な変更を除いて、学部と同一の調査用紙を用いた。

### インターンシップアンケート（学部用）

1 貴大学において、インターンシップをカリキュラムの一環として実施していますか。実施している場合は以下の質問にご回答ください。実施していない場合は裏面の2にお進みください。

- (1) 実施しているインターンシップ関連科目の科目名をご回答ください(複数ある場合は各々を列挙してください)。科目名( )
- (2) 実施している学科数をご回答ください。  
全( )学科のうち、( )学科で実施
- (3) 学年、実施時期、期間をご回答ください。
  - ① 実施学年：( ) 学年
  - ② 実施時期：学期中( ) 月、  
(① 春季、② 夏季、③ 冬季) 休業中(いずれかに○)
  - ③ 実施期間：( ) 週間
- (4) 卒業のための単位として認めていますか。
  - ① 卒業単位として、( ) 単位を認めている
  - ② 自由単位として、( ) 単位を認めている
- (5) 過去3年間の履修者数は何人ですか(調査可能な範囲で結構です。2005年度は実施済みの場合のみご回答くだされば結構です.)。
  - ① 2005年度：実施学科の入学定員( )人のうち( )人
  - ② 2004年度：        〃           ( )人のうち( )人
  - ③ 2003年度：        〃           ( )人のうち( )人
- (6) 派遣の前後にどのような支援を行っていますか(実施項目に○)。
  - ① 派遣前教育(実施している場合は、研修名をご回答ください) 研修名( )
  - ② ガイダンス説明会、③ 派遣受入先の紹介斡旋およびコーディネート、④ 派遣後の報告発表会、⑤ 派遣後のレポート提出、⑥ その他( )
- (7) 実施に関わる作業をどこが負担していますか(いずれかに○)。
  - ① 教員が中心、② 事務が中心、③ 教員と事務が半々、④ その他( )
- (8) インターンシップの教育効果についてご回答ください(いずれかに○)。
  - ① 大いにある、② 多少ある、③ どちらともいえない、④ あまりない教育効果があるとお答えの場合、該当項目をお選びください(複数回答可)。

- ① 目的意識を持つことによる学習意欲向上、② 大学での学習を実践を通して理解する、③ 専門分野のスキル取得、④ 就職のためのスキル取得、⑤ 職業を理解する、職業適性を知る。⑥ 社会におけるモラル、マナー、対人能力を身につける、⑦ 社会経験を通じた人格形成、社会の一員としての心構えを身につける、⑧ その他( )

(9) ご意見、お気づきの点があればご記入ください。

[ ]

2 インターンシップを実施していない場合、以下の質問にご回答ください。

- (1) 将来、実施する計画がありますか。
  - ① 計画中( ) 年度より実施予定
  - ② 計画なし
- (2) 過去に実施したことがありますか。
  - ① あり(中止に至った理由をお聞かせください)。( )
  - ② なし
- (3) ご意見、お気づきの点があればご記入ください。

[ ]